

## 論文



## ナラティブ・プラクティスを言語文化教育に再定位する試み

言語間の境界線の制約を乗り越えることを目指した対話の実践から

李思儀\*

(早稲田大学大学院日本語教育研究科)

## 概要

本研究は、心理的援助の枠組みで発展してきたナラティブ・プラクティスを、言語文化教育における社会的言語実践として再定位する可能性を探った。分析対象となった実践では、対象者と実践者が対話的関係性の中で、言語間の境界線の意味を問い合わせし、その制約を乗り越える可能性を開いていく過程が明らかになった。語り手の内面の変容を目指すのではなく、語りを支える社会的言説や関係性を再構成する営みとしてナラティブ・プラクティスを捉えた。そのような実践には心理的支援の専門性ではなく、語りと共に再構築していく倫理的構えが求められる。言語文化教育実践者が、共生社会の一員としての自覚と批判的自己省察の姿勢を持つことによって、語りへの関与が可能になる。本研究は「治療手法／実践方法」という制度的区分を越えて語りの場をひらく営みとして、ナラティブ・プラクティスを公共的かつ日常的な実践として構想する視座を提示した。

キーワード：ナラティブ・アプローチ、語りの実践、言語イデオロギーの脱構築

© ALCE 2025. Except where otherwise noted, this article is licensed under the CC BY-SA 4.0 license

## 1. 研究背景と問題意識

1. 1. ナラティブ・プラクティス<sup>1</sup>という営み

本稿の出発点には、私自身の実践を通して感じてきた違和感と問い合わせがある。これまで言語間の境界線の

\* Eメール : lisiyi.0728@fuji.waseda.jp

1 本研究では、「ナラティブ・プラクティス」と「ナラティブ・セラピー」という用語を、厳密に区別せずに用いる。両者は、もともと臨床心理領域において確立された「ナラティブ・セラピー」の実践を源流とし、そこから教育・福祉・地域実践などへと広がる中で、「ナラティブ・プラクティス」という語が用いられるようになりつつある経緯がある。ま

制約を乗り越えることを目的にナラティブ・プラクティスを行ってきた。しかしその過程で、「日本語話者の言

た、臨床を含む実践の現場や文献においても両者はしばしば同義的に使用されている。本稿ではこうした系譜を踏まえ、「ナラティブ・プラクティス」は「ナラティブ・セラピー」から派生し、「ナラティブ・アプローチ」の理念に基づく実践として位置づける。もちろん、近年の一部研究では、「ナラティブ・プラクティス」を「ナラティブを重視する一切の実践の総称」として広義に用いる動きも見られる。しかしながら、このような包括的な定義は本稿の立場とは異なる。また、「ナラティブ (narrative)」と「ナラティブ」という表記についても、文献上の揺れに由来するものであり、意味上の差異を意図するものではない。そのため、本稿では特段の区別を行わない。

語意識に介入する実践をセラピーの非専門家が行うのは危険ではないか」といった懸念の声を受けてきた。これらの声は、ナラティブ・プラクティスが心理的援助の専門領域に属するものだという認識の強さを物語っている。

ナラティブ・プラクティスは、ナラティブ・アプローチに基づく実践手法の一つである。心理臨床の領域において発展してきた背景を持つが、その理念と方法論は特定の専門領域に限定されるものではない。White & Epston (1990) に代表されるように、ナラティブ・プラクティスは「問題の外在化」や「支配的言説の脱構築」といった方法論をもち、従来の心理的援助の手法に代わる、より社会構成主義的な対話の方法として位置づけられている。近年の研究例を参照すれば、ナラティブ・プラクティスは社会的課題や構造的権力に働きかける対話の方法として、さまざまな領域で柔軟かつ批判的に展開されていることが確認できる。しかし、私が受けてきた指摘のように、その方法には「訓練を受けた心理的援助の専門家ののみが扱える」といった認識が根強く残っている。こうした理解は、ナラティブ・プラクティスが本来有する「問題を個人に帰属させず、語りを通じて意味を再構築する」という営みの可能性を狭めている。

したがって、むしろ教育実践の場にこそナラティブ・プラクティスを再定位する意義があるのではないか。例えば、言語文化教育では、モノリンガリズムや母語話者主義に基づく「特定の国家や民族に属する国民(母語話者)こそ、唯一の正統な言語使用者とみなされる」(李, 2024, p. 86)とする観念が、依然として教育現場や社会のさまざまな場面に根強く残っている。このような観念は、日本語という言語資源を持つ多様な言語的・文化的背景を持つ話者(以下、日本語話者<sup>2)</sup>)のうち、社会的に「正統な言語使用者」とみなさ

2 本稿で用いる「日本語話者」は、母語／非母語といった二分法を前提とせず、日本語を言語資源として持つ人々

れにくい立場に置かれている人々に対して、「正しくない」「不完全な」存在としての烙印を押し、自己否定的な語りを内面化させる要因となる。こうした葛藤を、個人の努力や適応の問題としてではなく、その背後にある社会的言説や構造の問題として捉え直す視点が求められる。その際、語りの再構成を通じて支配的言説に問い合わせを投げかけ、新たな意味の枠組みを他者と共に築いていくという営みは、教育や言語実践においても有効に機能しうる。つまり、ナラティブ・プラクティスは、個人と個人の間に社会的言説を共に語り直す実践として、従来とは異なる教育のあり方を提示しうる。

一方、現在のところ、ナラティブ・プラクティスを言語文化教育実践の中で展開した研究は高松、原(2023)以外、管見の限りではほとんど見られない。しかし、その理念と方法論は、教育制度に内在する言語イデオロギーへの批判的介入として、さらなる可能性を秘めていると考える。こうした可能性を見据え、本研究では、私自身が行った言語間の境界線の制約を乗り越えることを目指した対話の実践を手がかりに、ナラティブ・プラクティスを言語文化教育の文脈において社会的言語実践として再定位することを試みる。

## 1. 2. 言語間の境界線の制約を乗り越えることを目指した対話の実践

言語間の境界線の制約により、日本語話者は葛藤

を広く指す。この中には、日本語を母語とする日本国籍の人々(いわゆるマジョリティ話者)に加え、今までマイノリティとして扱われやすい立場にある人々が含まれる。例えば、日本語を第二言語・外国語として学んだ者、移動経験を有する日本国籍の者、日本国内において「標準語」を十分に話せないとされる方言話者など。既存の呼称(「外国人」「第二言語話者」「複言語話者」など)は有用である一方で、国籍や制度的分類に依存するため、本稿が問題化する言語間の境界線の揺らぎを十全に捉えにくい。以上を踏まえ、「日本語話者」という語を本稿独自の視点から再定義して用いる。

を抱えることがある。本論でいう言語間の境界線の制約とは、学習・教育・使用の場面における「特定の国家や民族に属する国民（母語話者）こそ、唯一の正統な言語使用者とみなされる」というイデオロギーにより、日本語話者が自分の中の複数の言語・文化を分断し、独立して存在するものとして捉える固定的な言語意識を指す。このような言語意識により、日本語話者は動的なアイデンティティー状態を包摂できないことがある。結果として、言語使用、人間関係、社会参加など多方面で葛藤を生じさせる。そのため、言語間の境界線の制約をどう乗り越えられるかは、現代社会に生きる人々にとって、喫緊の課題と言える（李, 2024, p. 104）。

もともと、言語間の境界線は流動的である。その流動性を前提とする理論は複数ある。例えば、複言語主義は個人がもつ複数言語の補完的役割を指摘している（Council of Europe, 2001, p. 4）。また、メトリンガリズム（尾辻, 2016）やトランスランゲージング（García, 2009）といった概念も、固定的な言語観を超えた実践を提唱している。それぞれの立場や背景には違いがあるものの、いずれも言語使用者を複数・複合的な言語資源を柔軟に行き来する存在として捉える視点を共有している。こうした視点を踏まえて、私は、日本語話者の葛藤に向き合うには、言語間の境界線の流動性に気づく契機をつくり、葛藤を巡る社会的言説を問い合わせ直す実践が必要だと考える。そこで、言語間の境界線の制約を乗り越えることを目指した対話の実践を構想し、実践してきた。

本実践は、ナラティブ・プラクティスの理念と方法論に基づいている。その中心的原則として、第一に、言語が現実を構成するという社会構成主義的視点、第二に、経験を語りとして外在化する方法、第三に、固定化された語りの脱構築と再構成の志向が挙げられる（White, 2007）。こうした視点に基づき、語りとは、単なる自己表現ではなく、現実の意味を構成する営みであるとして捉えられる。語りが変容すれば、自己の

位置づけや他者との関係性、そして世界の見え方そのものが変化しうる。私が構想する実践もまた、日本語話者が抱える葛藤に寄り添い、固定化された言語意識を問い合わせ直す対話を通して、新たな意味づけを模索する点において、ナラティブ・プラクティスと深い親和性を持っている。本研究では、特に、日本語話者に内在する思いや、語りたくても語れなかつた経験に耳を傾けながら、別の語りへと踏み出すプロセスを支える営みとして実践を位置づけたい。

### 1. 3. 日常的な関係性に行いうる実践

本研究は、語り直しの契機を、制度的な支援やセラピーの枠組みに依らず、信頼に基づく日常的な関係性の中で生み出すことを目指す。そこには、ナラティブ・プラクティスを心理的援助の専門技法としてだけでなく、共生社会において誰もが担い手となりうる対話的営みとして再定位するという問題意識がある。

この問題意識の背景には、当事者としての経験がある。私は日本社会において、外国籍で非母語話者でありながら日本語話者として生活してきた。その過程で、言語間の境界線が固定化される場面に何度も直面してきた。こうした経験を通じて考えたのは、制度や社会構造が容易には変わらないことである。だからこそ、日常的な関係性の中で言語意識の枠組みを問い合わせ直し、語りを再構成する営みが、個人の生に根ざした共生の道を拓くのではないか。

しかし、こうした問い合わせ直しは自動的に訪れるものではない。多くの人は、言語的・文化的マイノリティであるがゆえの葛藤を個人の適応の問題として内面化しており、それを再考する機会が乏しい。だからこそ、制度的支援に限らず、日常的な対話の中で互いの経験に耳を傾け、語り直す契機をともに築いていく営みが重要である。言語や国籍に限らず、人は誰しも、社会の中で少数者的な立場に置かれる可能性を持っている。そのため、共生社会を生きる一人ひとりには、自

身の位置づけを問い合わせ、他者の語りに開かれる姿勢が求められる。こうした営みを支えるためにも、ナラティブ・プラクティスを日常的な関係性に根差した社会的言語実践として再定位する意義は大きいと推測する。

本研究はこの視点に立ち、ナラティブ・プラクティスを言語文化教育における社会的言語実践として再定位し、その可能性を検討していく。

## 2. 理論的枠組み：ナラティブ・プラクティスとは何か

### 2. 1. ナラティブ・プラクティスとは

本節では、ナラティブ・プラクティスの理念と方法論を整理する。ここで扱うナラティブ・プラクティスは、ともと心理的援助の手法として発展したが、現在では教育や社会実践を含む多様な分野に広く展開されている。まず、社会構成主義に基づく「専門家を消し去る」特徴を確認し、次に二つの中核的手法である①「問題の外在化」、②「支配的言説の脱構築」に関わる「ドミナント・ストーリー」と「オルタナティブ・ストーリー」の概念を紹介する。最後に近年の実践事例を通して、その社会的展開の可能性を概観する。

ナラティブ・プラクティスの根底には、現実や意味は客観的に存在するのではなく、人々の相互作用の中で構成されるという社会構成主義の視座がある。この視点から、実践者は正しい答えを提示する専門家ではなく、語りの共創者とされる。ホフマン(1992/2014)はこの立場を「専門家を消し去る」と表現し、無知の姿勢を持つことの重要性を指摘している(p. 32)。つまり、実践者が知識や権威によって尊くのではなく、対話を通して新たな理解を共に生成する構えである。

「専門家を消し去る」構えのもとで実践される主要な方法論が「問題の外在化」である。White & Epston (1990) は、問題が問題であって、人が問題

なのではないという立場から、問題を語りの中で対象化し、語り手と問題との間に距離を取るという「問題の外在化」の理念を提案した(p. 40)。問題を外在化することは、対話の中で社会的文脈や権力関係に注意を向ける契機となる。もう一つの重要な方法論は、「支配的言説の脱構築」としての「ドミナント・ストーリー」と「オルタナティブ・ストーリー」の概念である。語りは個人の内面から自然に生じるものではなく、「進学すべき」「自立すべき」など、社会的に流通する言説に影響されて形成される。こうした言説は、語り手の生き方を制限し、違和感や苦しみの要因となりうる。野口(2009)はこのような支配的言説を「ドミナント・ストーリー」と呼び、それが語りの方向性を定め、時に問題の内在化を引き起こすと指摘している(p. 20)。ナラティブ・プラクティスは「ドミナント・ストーリー」に働きかけ、語り手と共に語られてこなかった視点や経験を掘り起こし、「オルタナティブ・ストーリー」として再構成していく実践である。語りの枠組みを参考することで、語り手はより望ましい物語を選び直すことが可能になる。

ナラティブ・プラクティスの実践は心理的援助にとどまらず、近年は多様な領域に広がっている。例えば、Fox & Brummans (2019) は多職種連携チームにおけるナラティブ・プラクティスを異なる職種間で対象者の状況理解を「共に物語る」プロセスとして捉えている。ナラティブ・プラクティスは対話の質を高め、より包括的な理解を促進する手法として注目されている。Winslade (2019) は、政治学におけるナラティブ・プラクティスの可能性を論じ、語りを通じた権力構造の分析の重要性を主張する。Hammoud-Beckett (2022) はクィア・ムスリムの語りに寄り添うナラティブ・プラクティスを提唱し、人種差別や宗教的抑圧、ジェンダー規範といった複層的な抑圧構造の中で、新たな語りの可能性を示している。加えて、高松、原(2023)は日本語教育において、学習者が内面化した「ドミナント・ストーリー」を問い合わせ直し、自律的な学習動機や新

たな語りを再構成する実践を報告している。このような実践は、ナラティブ・プラクティスが心理的援助という文脈以外の対話の中で、人々の学びや意識の枠組みに働きかけうる可能性を具体的に示している。

以上のように、ナラティブ・プラクティスはもはや心理的援助の枠にとどまらず、「語りを通じて現実を問い合わせ直す」方法として、職場、政治、ジェンダー、教育など幅広い領域に展開されている。その中心には支配的言説を脱構築し、新たな意味づけを生成する社会構成主義的対話の力がある。とはいえ、言語文化教育の分野では依然として検討の余地が多く残されている。本研究は、こうした理念と方法論を基盤に言語意識の再構成を支える教育的実践の可能性を探るものである。

## 2. 2. ナラティブ・プラクティスと言語文化教育実践との接点

本節では、ナラティブ・プラクティスと言語文化教育実践との接点を整理する。まず、本稿における「教育」の捉え方を明確にし、対話の実践をどのように教育実践として位置づけるかを検討する。次に、ナラティブ・アプローチとの比較を通して、ナラティブ・プラクティスの特徴と可能性を確認し、最後に、言語教育におけるナラティブ研究の中での位置づけについて述べる。

### 2. 2. 1. 本稿における「教育」の捉え方

ナラティブ・プラクティスを言語文化教育実践として捉えるには、まず「教育とは何か」を問い合わせ直す必要がある。本研究では、教育を学校制度内の知識伝達に限らず、人と人との対話を通じて、現実や価値観、自己・他者・社会のあり方を再構成するプロセスとして捉える。その意味で、フレイレ（1979/2018）が唱えている「対話的教育」（p. 174）は、ナラティブ・プラクティスと深い親和性を持つ。フレイレにとって教育と

は、単なる「教える／教えられる」の関係ではなく、抑圧の構造を共に捉え直し、変革を目指す対話的営みである。こうした教育觀は、「問題の外在化」や「支配的な言説の脱構築」を重視するナラティブ・プラクティスの立場と重なり、社会的言説に内在化された意味を問い合わせ直す実践としての教育的意義を見出すことができる。

さらに重要なのは、ナラティブ・プラクティスが制度化された教育の場に限定されるものではないという点である。フレイレの教育觀でも、教育は特定の施設内で完結するものではなく、むしろ日常の関係性のなかで発揮される自由の実践である。この視点に立てば、ナラティブ・プラクティスは学校やカウンセリングの場に限らず、日々の生活の中でも成立し得る。とりわけ本研究が対象とする日本語話者にとっては、制度的支援を超え、言語的・文化的葛藤を抱える日常の中でこそ、対話の実践が必要とされる。「私は日本語が下手=だめ」といった内面化された言説に対して、日常的対話の中で別の語りが紡がれれば、それは語りを通じた教育として機能しうる。制度の外にあるからこそ開かれる関係性の中で、ナラティブ・プラクティスは共生社会の実践として展開可能である。

### 2. 2. 2. ナラティブ・プラクティスとナラティブ・アプローチとの関係

2. 1. で述べたように、ナラティブ・プラクティスは、社会構成主義に基づき、語りを関係性の中で意味が生成されるプロセスとして捉える。この理念は、ナラティブ・アプローチと呼ばれるより広義の枠組みに基づいている。つまり、ナラティブ・プラクティスはナラティブ・アプローチの実践の一形態として位置づけられる。一方で、両者には方法論上の焦点の置き方に一定の違いがある。

ナラティブ・アプローチは、柔軟な枠組みでありながら、ナラティブ・プラクティスのような社会的言説への批判的介入や、対話者の関係性に基づく働きかけに

については必ずしも重視してこなかった。野口（2018）は、ナラティブ・アプローチを「語りという概念を手がかりに現象を理解しようとする方法の総称」（p. 31）とし、語られた内容だけでなく、語りが社会的意味をいかに構成し影響するかに注目する実践と定義している。この枠組みは教育・福祉など多様な場面で展開されており、言語文化教育におけるヒューマンライブラリーのような実践（宮崎, 2023）もその一例である。ナラティブ・アプローチには明確な方法論ではなく、実践者や文脈に応じて多様に展開される。

これに対し、ナラティブ・プラクティスはより方法論的に整理された実践として、問題の構造を問い合わせし、新たな意味づけを生成することを目的としている。実践者によって様々だが、「問題の外在化」や「支配的言説の脱構築」といったアプローチが重視され、語りの中で意味が生まれるプロセスに焦点を当てている。さらに、宮崎（2023）が指摘しているように、ナラティブ・プラクティスは、対話者の現実の人間関係やパワーバランスを前提とする点でも、日常生活から切り離された語りの場を前提とする実践とは異なる特性を持つ（p. 76）。

ただし、ナラティブ・プラクティスとナラティブ・アプローチが方法論の面で異なることを認めた上で、その境界を固定化するのではなく、むしろ重なり合う実践の地平を再検討すべきだと考える。というのも、ナラティブ・プラクティスはしばしば臨床的な手法として位置づけられ、それがナラティブ・アプローチとの差異として強調される傾向があるからである。野口（2009）は「ナラティブ・プラクティス」と「ナラティブ・アプローチ」を区別し、前者を「治療」という前提に立つ技法的・倫理的枠組み、後者をより自由度の高い「人間科学的な実践的活動」として位置づけている（p. 143）。こうした分類は、実践の目的や文脈に応じた整理として一定の有効性を持つ一方で、実践を「治療手法／実践方法」といった二分法に還元することで、その可能性を狭めてしまうおそれもある。

実際、ナラティブ・プラクティスは心理的援助の領域において発展してきたが、近年ではその実践が多様な領域へと広がりつつある。特に、語り手が内面化した社会的言説に批判的に介入し、新たな意味づけを模索する実践として、言語文化教育においても大きな可能性を持つ。もちろん、歴史的・社会的文脈から言語教育におけるイデオロギーを問い合わせ研究もこれまで蓄積してきた。しかし、義永（2021, p. 149）が指摘するように、決して多いとは言えない。それらの多くは教室内にとどまり、学習者の日常的・複層的な言語経験には十分に目を向けられていない。ナラティブ・プラクティスは、こうした制度的な枠の外においても、語りを媒介として学びや意識の変容を支える人間科学的な実践活動として展開可能ではないか。

## 2. 2. 3. ナラティブ研究におけるナラティブ・プラクティスの位置づけ

本研究では、ナラティブ・プラクティスを、単なる語り手の経験やアイデンティティを表出する手段としてではなく、語り手と聞き手の相互作用のなかで意味を生成し直す、関係的な実践として捉える。こうした立場は、保坂（2014）が提案する「ナラティブについて（on narrative）」「ナラティブで（with narrative）」「ナラティブを介して（through narrative）」という三分類のうち、「ナラティブを介して」の研究に位置づけられる。「ナラティブを介して」の視点では、語りが生じる場の相互作用において、どのように意味が生成され、自己やアイデンティティが構築されるかに着目する（p. 5）。保坂は、語りの結果や効果ではなく、語りのプロセスそのものが他者との関係のなかで生成されることに注目すべきだと主張している。この視点の特徴は、語りを固定された内容としてではなく、意味の絶え間ない生成運動として捉える点にある。

言語教育におけるナラティブ研究について、語りを分析対象とすることで学習者や教師の言語意識・アイデンティティ・言語習得過程を可視化する研究や、語り

を活用した教室実践として、経験や自己表現を促す活動の報告などが主流であった（嶋津, 2018, p. 58）。しかし、語りの中で意味が「生成される」プロセスそのものに注目する研究は少なかったと言える。本研究は、そうした空白を補う試みである。ナラティブ・プラクティスに基づく言語文化教育実践では、言語的・文化的に多様な背景を持つ話者が、他者との対話を通じて語りを再構成する経験が促される。この経験は、固定的な言語意識やアイデンティティ観に揺さぶりをかけ、新たな意味づけを模索する教育的契機となる。本研究は、そのようなナラティブ・プラクティスの意義と可能性に注目したい。

## 2. 3. 本研究の立場と研究目的

ナラティブ・プラクティスとナラティブ・アプローチは、理念や方法論において異なる実践であることを認めつつも、「治療手法／実践方法」といった二分法では捉えきれない実践の地平があるのではないか。とりわけ、日本語話者が日常的な関係性の中で社会的言説を問い合わせる語りの営みは、教育的にも意義を持つと考えられる。本研究は、そのような視点から、ナラティブ・プラクティスを心理的援助の枠に限定せず、言語文化教育における社会的言語実践として再定位する可能性を探ることを目的とする。そのため、以下の2つの問い合わせを設定する。

RQ1: ナラティブ・プラクティスは、心理的援助の専門性に頼らずとも、対話的関係性の中で語りを支えることは可能か。

RQ2: それが可能であるとすれば、どのような実践者の構えが必要か。

問い合わせに取り組むために、言語間の境界線の制約を乗り越えることを目指した対話の実践を分析対象とする。分析では、実践の内容、語りの働きかけ、実践者の省察という視点から、ナラティブ・プラクティスを再定位する可能性を検討していく。

## 3. 事例の概要：言語間の境界線の制約を乗り越えることを目指した対話の実践

### 3. 1. 実践の内容と研究倫理の確保

本実践では、ナラティブ・プラクティスを通じて1名の対象者と新たなナラティブを協働で構成し、言語間の境界線の制約を乗り越えることを目指した対話の実践を行った。実践は、2022年11月から2023年3月にかけて行われ、2時間の対話が1回、30分以内の対話が5回、1時間30分の対話が2回という形で実施された。すべての実践は対面で行われ、カフェや公園、私の自宅など、リラックスした環境の中で進められた。

実践は、対象者との日常的なやりとりのなかで、言語的・文化的違和感や葛藤のような断片的な語りがふとこぼれ落ちる瞬間に出会い、それを「語りの糸口がこぼれ出る契機」として受け止めたことから始まった。こうした語りは、未分化な感覚のかたちで現れ、対話を通して少しづつ輪郭が浮かび上がってくるものであった。私は、語りに耳を傾けながら、応答するかたちで対話を重ねていった。やりとりを通して、語りの背後に何があるのかを少しづつ一緒に確かめていくなかで、言語間の境界線の制約が作用している可能性は、徐々に見えてくるような場面もあった。以下では、語りの糸口をもとにどのように対話が進められていったのか、そのプロセスを整理していく。

まず、対象者の語りに丁寧に耳を傾け、その中に潜む言説や前提に気づき、それをともに捉え直す視点を共有する。その上で、それらの前提に対して問い合わせを差し挟み、別の視点を開くことで、葛藤の意味や位置付けをずらしていく。さらに、既存の言説に依拠しない語りの可能性を探りながら、支配的であった解釈枠組みの再構成をともに試みる。最終的には、葛藤そのものを新たな観点から捉え直すことで、言語間の境界線の制約を乗り越えていくことを目指す。

本実践で展開されたナラティブ・プラクティスの手法

は、国重（2013）およびWhite & Epston（1990）の理論を参照しつつ、実践の中で柔軟に調整を加えながら構成されたものである。①問題の構築（ナラティブの引き出し）、②語り直しと可能性の拡張（ナラティブのすり合わせ）、③言説の脱構築（ナラティブの再構築）という三段階で成る。なお、本プロセスは、問題を発見し即座に解決へと導く線形的なモデルではない。ナラティブを媒介として、問題の発見と再構築という二つの次元が交錯しながら進行する。実践者の語りかけや姿勢により、対象者の語りに潜在していた問題が新たに浮かび上がる。と同時に、対象者自身もまたその問いかけを通して別の見方を得ていく。語りの変容とは、そうした関係性の中で協働的に生成される営みである。

研究倫理の観点では、実践開始前に研究の目的と方法を丁寧に説明し、対象者から文書による同意を得た。各実践は、日常の自然な活動の一部として行われた。例えば、対象者と共に外出したり食事をしたりする日常的な交流の中で語りが生まれた。その際、「この場面は研究として記録可能か」と判断した場合には、録音の可否をその都度確認し、了承を得てから音声を記録した。このような手続きにより、研究の過程が対象者にとって意識化され、研究の透明性と倫理性が確保された。さらに、このようなプロセスを採用した理由は、本研究が主張する日常的な関係性の中で行われる対話の活動という概念を近付けるためである。

実践で用いた言語は主に中国語であったが、日本語や英語の単語も混在して使用された。私も中国語を母語とする日本語話者であり、共通の言語である主に中国語を用いることで、対象者がより自由に語ることができることを整える意図があった。録音にはスマートフォンを用い、対象者の同意のもとで音声データを収集し、それを文字起こし・翻訳した上で、内容の確認を対象者に依頼した。その上、実践のたびに録音内容を振り返りながら、自らの応答や判断がもたらし

た影響について検討を重ねた。

### 3. 2. 対象者の概要と実践に至るまでの経緯

本研究の対象者であるミナさんは、中国語を母語とする日本語話者である。2016年に中国の高等学校を卒業後、来日した。2016年から2018年まで日本語学校に在学し、2018年から2022年にかけて東京都内の私立大学の学士課程を修了した。その後、2022年4月から2024年4月までは同大学大学院の理系研究室に所属していた。実践は大学院在籍中の2022年11月から2023年3月にかけて行われた。

本実践は、私とミナさんとの間に築かれた日常的で継続的な関係性を基盤としている。研究協力や教育的支援といった一方向的なものではなく、互いの経験や関心を共有しながら育まれてきた双方向的な関係である。私は日本語教育を専門としつつ、複数言語を用いて生きる自身の経験から、ミナさんとの対話において共に語りを編んでいく姿勢を重視した。そして、実践では、実践者と対象者との間にある関係の非対称性に自覚的であることが重視された。私は、日本語教育の専門家として認識されやすい立場にあった。その一方で、日常生活の中にミナさんから言葉や感覚を教わる場面も多く、むしろ共に迷う関係性を大切にしてきた。「支援する／支援される」という一方的な枠組みにとらわれず、語りを協働的に構築する姿勢を意識した。

実践を開始する直接の契機は、対象者の語りの中に、ことばにならない違和感や葛藤が立ち現れることであった。私はそれを「語りの糸口がこぼれ出る契機」として受け止めた。本研究では、このような契機を、対象者が言語や文化に関わる経験を語ろうとする意志が芽生えたとき、あるいはそれを言語化するため他者の語りを必要としたときに生じるものと捉える。こうした契機に実践者が応答するかたちで、意味を問い合わせ対話が始まった。以下では、実践に至るま

での経緯を2つの時期に分けて記述する。

#### (1) 2016年～2022年8月：関係性の構築期

ミナさんとは2016年に共通の趣味を通じてオンラインで知り合った。当初は趣味に関する情報交換を中心であったが、2019年に私が日本に長期滞在するようになって以降、やりとりが日常生活に広がり、徐々に考え方や感情を共有する関係性へと発展した。例えば、日本での生活に戸惑っていた時期にはミナさんが助言をくれた一方、ミナさんが進路について私に相談することもあった。こうした関係性の中で、ミナさんの日本語学習歴や日本社会との関わりについて聞くようになった。ミナさんは中学生の頃からアニメをきっかけに独学で日本語を学び、来日後は日本語学校に通ったが、授業にはあまり手応えを感じなかったという。むしろ字幕翻訳やアルバイトでの通訳といった実践的な場面で培った日本語こそが、自分にとっての使えることばだった。

#### (2) 2022年8月～2022年10月：調査の開始と葛藤の可視化

この時期、言語間の境界線の制約が日本語話者にもたらす葛藤に関心を持ち、ミナさんがその問題意識と深く響き合うことに気づいて調査協力を依頼した。ミナさんは社会的実践を通じて日本語能力を育んできたが、自身の能力について「基礎が弱い」と繰り返し語っていた。その背景には、日本語と中国語という複数の社会的文脈において「不十分」と評価されてきた経験がある。特に中国語においても、彼女が日本に長く滞在するにつれて、母語話者である周囲の人々や両親から「あなたの話し方はだんだん中国語らしくなくなっている」「どこの国の人かわからない、日本人みたいだ」といった否定的な言葉を受けた経験がある。李(2024)では、ミナさんは自らの言語的・文化的な位置づけを「国家」や「言語」といった枠組みで整理しようとする一方で、異なる価値観が衝突し、ア

イデンティティが揺らぐ様子を明らかにしている。私はそうした語りの断片の中に、内在していた葛藤が可視化され、語り直しを必要とする兆しを見出した。これを「語りの糸口がこぼれ出る契機」の一つとして捉え、継続的な対話の実践へと移行することを決めた。

#### 4. 事例の分析：ミナさんとのナラティブ・プラクティス

本章では、ナラティブ・プラクティスを心理的援助の専門技法としてではなく、言語文化教育における社会的言語実践として再定位する立場から、私が実施した一事例を取り上げ、詳細に分析する。分析では、対話がどのように変容し、それがいかに支えられたのかを明らかにする。そして、研究者・実践者自身の問いかけや応答のあり方、関係性の構築について省察を加える。

##### 4. 1. ミナさんが抱える葛藤<sup>3</sup>

本節では、ミナさんが抱えていた葛藤を明らかにする。2022年11月に、ミナさんの同意を得て、彼女が日常生活において日本語を使用する際や、日本人との関わりにおいて経験している違和感について語す機会を得た。当時、ミナさんは大学院に進学して半年が経過していたが、日本人との人間関係について「うまくいっていない」という感覚を語っていた。特に、学部時代から4年間付き合いがあった日本人の同級生と共に大学院に進んだものの、「関係がうまく築けていない」という実感があったという。

語りの中で特に印象的だったのは、ミナさんは「日

<sup>3</sup> 本節で扱う語りの一部は李(2024)でも取り上げた内容である。ただし本稿では、ミナさんのプロフィールの理解および、実践における葛藤の変容と対話の働きかけの分析に至る導入として、必要最小限の範囲で再掲している。関心の詳細については同論文を参照されたい。

本語」への言及が少なく、「日本人」への言及が圧倒的に多かった点である。彼女は自身の日本語能力に対してこだわりを示すことはなかったが、日本人にどう見られているかに対して強い関心と不安を持っていた。「日本人に知られたくない」や「日本人に関わるとおかしい」についての思いが、少しずつ言葉として立ち現れていった。私は、それらの語りに応答しながらミナさんが経験している葛藤の背景に何があるのかをともに確かめていく対話を模索していった。

ミ：日本人の友達には、こういうプライベートな面を知られたくない。むしろ、隠してると言ってもいいくらい。アイドルに夢中になると、自分でも「おかしくなる」って感じるくらいで、とても人は見せられない。

李：「おかしくなる」って話してたよね。それができるのは中国人と一緒にときで、日本人とは無理だと。なぜそう感じるんだろう？

ミ：日本人と出会うのって、たいてい学校の関係からだから。プライベートな話ができるのも、学校の友達くらい。でも、そういう日本人の友達には、内面的でネガティブな部分は知られたくないって思う。アイドルのことで夢中になると本当におかしくなってしまうから、表には出せない。

李：例えば、趣味やアイドルの話って、日本語と中国語で使い分けてる日本人とは話しにくいから？

ミ：話しかけてくれる人もいたけど、そのときは自分から話を切り上げた。そういう話をすると自分のテンションが上がりすぎてしまうから、避けるしかなかった。

李：「一緒におかしくなれる」のは、仲のいい中国人だけ？

ミ：特別に仲良くなくとも、中国語じゃないとそういうふうには話せない気がする。最近、同じクラスの中国人がアイドルの話題を出したんだけど、それをきっかけに、私の話し方が一気に変わった。ダイレクトな言い方になって、感情のままに

言葉が出てしまった。とにかく伝えたかった。

李：相手の受け止め方を見ながら話してるんだね。すごく繊細な配慮だと思う。

ミ：それが普通かなって思ってる。でも日本人と日本語で関わると、すごく不自然に感じる。疲れるんだよね。何をどう言うか、ずっと考えて調整しなきゃいけない。やっぱり、中国人と話すときの感覚とは全然違う。理由はうまく言えないけど、日本人はどうしても深い関係になれない気がする。

ミナさんは、日本人の友人には自分の内面的な部分を「知られたくない」「むしろ、隠している」と語った。例えば、アイドルを熱心に応援する自分の姿は「おかしくなる」ほど夢中になるものであり、日本人にはとても見せられないと述べた。一方で、そうした感情を伴う話題は中国語でなら語ることができ、日本語と中国語とで話す内容や表現の領域がはっきり分かれているという実感が語られた。

こうした語りからミナさんは、「日本語で話す自分」と「中国語で話す自分」との間に明確な違いを感じている。そしてその違いが、他者との関係性のあり方にも影響を及ぼしていることが見てくる。例えば、「日本人とは深い関係になれない」と彼女が語った背景には、「おかしくなる自分」を出せないという葛藤が複雑に絡んでいる。

語りを通して、私はミナさんが二つの言語文化のあいだを行き来する中で抱える葛藤を具体的に認識した。そして同時に、「おかしくなる」ということばがミナさんにとってどのような意味を持つのか、彼女とともに探究していく必要性を感じた。

李：「日本人とは深い関係になれない」というのは、「おかしく」なれないという意味？

ミ：そうだと思う。日本人は、そういうふうになるのを嫌がる気がする。「変な子だな」って思われるかもしれない。でも、仲が良い相手には、言いたいことはちゃんと伝えたい。中国人だけ

じゃなくて、韓国人もそうかもしれないけど、みんな強い感情を持ったときは、それをきちんと表に出す。でも日本人は違って、すごく婉曲にする。それが私には本当に難しい。だったら、何も言わないほうが楽。

李：「日本人と関わるのが不自然」と感じるのは、どんなとき。

ミ：気を遣いすぎてるとき。例えば、私は日本人に、自分がアイドルを追つてることを話せない。理由ははっきりしないけど、「話しちゃダメ」って感覚がある。学校の中での普通の話題しか話せない。そしておけば、間違いが起きないから。

李：なぜ「話しちゃダメ」と感じるんだと思う？

ミ：それが…自分でもうまく言えない。

ミナさんは、日本語を使っているとき、自分がどこか不自然であると感じていた。例えば、「なぜか分からなければ、『話しちゃダメ』という感じがする」と語り、自らの趣味や内面的な話題を避ける傾向があったという。友人関係においても、誤解を避けるために「間違いが起きない」よう配慮して言葉を選んでいたが、それでも「日本人とは深い関係になれない」という感覚が残り続けていた。語りが交わされる中で、「なぜそう感じるのか」という問い合わせ、私の中からふと浮かび上がった。しかしミナ自身、それまでその違和感の由来について立ち止まって考えたことはなかった。

語りを通して見えてきたのは、ミナさんが感じていた「話しちゃダメ」という感覚が、単なる個人の性格や人間関係に起因するものではなく、言語間の境界性の制約に関わる可能性があるということである。ある話題は中国語で話すべきものであり、別の話題は日本語で話すべきものという明確な線引きを自然に設けていた。こうした語りから、ミナさんは日本語で語ることに対する、無意識のうちに何らかの制約やルールのようなものを感じていたことがうかがえる。言語使用とい

う技術的な問題というよりも、社会的なまなざしのなかで育まれた感覚でもあった。日本語は、彼女にとってるべき姿や社会的な規範と結びついた言語であり、そのことが自由な語りや感情の共有をためらわせていた。

#### 4. 2. 葛藤の変容と対話の働きかけ

本節では、ナラティブ・プラクティスに基づく対話がどのように変容したのか、対話がどのように働きかけたかを明らかにする。

2023年1月の冬季休暇中、ミナさんと私は連れ立つて商店街に買い物に出かけた。歩き疲れた帰り道、ふたりでカフェに立ち寄り、何気ない雑談を交わしていた。自身の予定として「忘年会の会場は予約がとても取りづらく、2～3か月前から計画しなければならない」と話したところ、ミナさんは「日本ではそういうものだし、日本人も当日に誘うなんてことはありえない」と応じた。その話には、どこか断定的な響きがあり、ミナさんが「日本人」や「日本のやり方」についてどのような枠組みで捉えているのか、私の中でちょっとしたひっかかりが残った。「なぜそう思うのか」と問い合わせ返すと、ミナさんは日本人を食事に誘うことに対して自分が感じている戸惑いや葛藤について語り始めた。そして、私に意見を求める姿勢を見せた。それをきっかけにこの場をナラティブ・プラクティスとしての時間として捉えることにし、ミナさんの同意を得たうえで録音を開始した。

ミ：実は、私も昔似たようなことがあった。大学生のとき、たまたま「今からご飯行く」って話になって、顔見知りの日本人を誘ったら、断られた。そのとき中国人の友達に、「日本人はそんなふうにストレートに誘えないんだよ」って言われた。日本人って、「今日約束ある」って言っても、実際は大した用事じゃなくて、とりあえず「約束があるから、また今度にしよう」って返す

習慣があるらしい。

李：中国人の友達は、日本人との関わりでそういう経験をたくさんしてきたのかな。

ミ：たぶん、そうだったと思う。とにかく、「日本人とはその日の予定は基本的に取れない」って言ってた。誘うなら、少なくとも1週間前に声をかけるべきなんだって。基本的に、授業終わりに「一緒にご飯行こう」みたいな流れはなくて、「来週時間あつたら飲みに行こう」みたいな感じが普通らしい。

李：自分の日本人の友人ともそういう関わり方だったのかな。みんなそういう感じ？

ミ：正直わからない。そのとき断られてから、同じ日に誰かを誘うのが怖くなつた。「日本人ってみんなこうなんだ」と思つてしまつて、直接誘うのは無理だな。

李：日本人を誘うのが怖いって感じてるんだね。それって、何か困つてることにつながつてる？

ミ：私は、友達をつくるときにきっかけをつくることが大事だと思ってる。ご飯食べたり、遊びに行つたり、ちょっと話したりすることが、そのきっかけになる。でも、日本人とはそのきっかけがつくれない。私はそれができない。

ミナさんは、「日本人を当日に誘つて断られた経験」について、中国人の友人に相談したことがあったという。そのとき、「日本人はストレートに誘えないんだよ」という言葉を受け取り、以降、「日本人には当日に誘つてはいけない」という認識が強く心に残つていた。語りを聞きながら、私は、言語や文化のあいだに引かれた固定的な境界線が、そのような言葉を通して再生産されているかもしれないと感じ取つた。そこで、ミナさんが友人の言葉をどう受け止めていたのか、また、その友人自身の経験についてどう思つているのかを尋ねた。しかし、ミナさんにとっては、そうした問い合わせでその出来事を捉え直すこと自体が、これまでにない視点だったようだつた。

ナラティブのすり合わせを通じて、彼女自身の経験に基づいて日本人との関わりにおける別の可能性をともに見出すことを試みた。しかし、ミナさんの中には「日本人とはこういうものだ」という固定的なイメージが強く存在しており、それが彼女自身の主体的な関係構築の試みを阻んでいた。私はそこで、「日本人を当日に誘うことができない」という考え方による影響を問うようにアプローチを転換した。やりとりの中で浮かび上がつたのは、ミナさんが日本人と友達になれないのは、自分が「きっかけを作れない」人間だからだと捉えていることであった。その背景には、人間関係の構築を始めようとする場面で、失敗や拒否を避けようとする気持ちとともに、「きっかけを作れない私」という語りがいつのまにか彼女のアイデンティティの一部として根づいていた。

李：なぜ、きっかけがつくれないと感じるの？

ミ：仲良くなろうと思えば、年が離れてても関係はつくれると思う。でも日本人とは、自分から関係を深めようとする人が少ない。そもそも、どうやってきっかけをつくればいいか分からなくて。

李：中国人のアイドル好きの子といふとき、ミナさんはちゃんと話を受け止めていたよね。なのに、日本人が相手だと難しくなるのはなぜだろう？

ミ：私が日本人のことを分かってないからかも。まだ自分が日本人っぽくないのかもしれない。大学で会つて4、5年一緒にいる日本人の友達もいるけど、親しみは感じてない。その関係が、相手から見てどう思われてるのかも分からぬ。

李：一番仲のいい友達に、聞いてみたことは？

ミ：いや、聞けない。恥ずかしいし。日本人のことはたぶん一生分からないんじゃないかなって思つて。だから、ほんとの意味で友達にはなれない気がする。

李：でも、ちゃんと日本人の友達と関係は築けてる

よね。ただ、相手に対するイメージに少し怖さを感じるように思う。もしかしたら彼らも同じように遠慮してるかもしれない。どうして本人に聞けないんだろう？

ミ：うーん…やっぱり当日に誘うのって、迷惑をかける気がする。だから無理。聞けないというより、自分の中で「してはいけないこと」になってる。

ミナさんは、日本人と深い関係性を築けない理由として、「日本人のことは分からぬ」と語った。けれどもその語りには、「日本人とはこうであるべきだ」という、すでに明確な理想像が含まれているようにも感じられた。そしてその理想像に、自分がうまく適合できないという感覚が、彼女の言葉の端々からにじんでいた。結果として、実際の日本人の友人という具体的な他者との関係性に踏み込むことをためらっていた。ナラティブを引き出すなかで、そのような理想像と実感とのあいだにある矛盾が、ミナさん自身の語りのなかでも意識化されはじめた。

そこで私は、その矛盾に寄り添いながら、具体的な日本人の友人とのやりとりについて尋ねてみた。すると、ミナさんはその経験をひとつずつ思い返しながら語り出した。そうしたやりとりの中で、ミナさんは「自分がダメだからうまくいかない」と捉えていた状況に対して、徐々に「関係性そのものの中に何かがあったのかもしれない」と視点を揺らがせはじめていた。それは、問題の所在を個人の内面に閉じこめるのではなく、語りの中で外在化していくような対話でもあった。

李：もしかしたら相手はミナさんのことを迷惑だなんて思っていないかもしれないよ。

ミ：いや、たぶん迷惑だと思う。日本に長くいると、みんな「人に迷惑をかけないように」ってすごく気をつける感じがある。

李：私も前はそう思ってたけど、実は日本人も、未知のものへの不安から拒絶してしまうことがある。

る。「迷惑をかけたくない」っていうより、人によると思う。遊びたいと思ってる人なら、ミナさんの誘いを迷惑とは感じないはず。実際、日本人の友達に迷惑をかけてると思う？

ミ：それは思わない。

李：でも、「日本人は自分のことを迷惑だと思ってる」って感じてるよね。どうして？

ミ：考えたことなかった。確かに、実際に迷惑をかけたわけじゃない。

李：前に敬語の授業で、ディスカッション中に日本人学生が「留学生と友達になりたいけど、どう声をかけたらいいか分からない」と言ってた。もしかすると、日本人も中国人のことを「礼儀がない」とか「近寄りがたい」と感じてるのかもしれない。ミナさん自身は、自分が礼儀がないと思う？

ミ：そんなことはない。言われてみれば、たぶん人によるんだと思う。今の同期はみんな同じ学部で、関係もカジュアルだから、そんなにルールがあるとも感じていない。

李：そうなんだ。例えば、どんなことがあった？

ミ：私が言い出したわけじゃないけど、似たようなことはあった。週1くらいでみんなで食事に行ってたんだけど、日本人の一人が「来週の予定が変わりそだから別の日にしよう」と言って、「じゃあ今日でもいいんじゃない」って流れになって。

李：その人、誰かに迷惑をかけたと思う？

ミ：そう考えると、確かに当日でも会えるし、約束を取ることもできる。でも、相手のことをあまり知らない状態で、自分から誘うのはやっぱり無理だと思う。

李：それって日本人かどうかに関係なく、親しさの度合いによることだと思う。距離があるところから、親しい関係になるまでって、誰にとっても難しい。

ミ：日本人はそこまでこだわってるわけじゃないの  
かもしれない。

李：かもしれないね。じゃあ、「日本人かどうか」は  
関係あると思う？

ミ：うーん、あんまり関係ないかも。結局は関係性  
次第。例えば、アイドルに興味のない中国人  
を、いきなりライブに誘ったりはしないし。

ナラティブのすり合わせの中で、ミナさんの語りには少しずつ揺らぎが生まれていた。例えば、日本人と関わる際、「人に迷惑をかけてはいけない」という意識が強くある一方で、自分はすでに迷惑をかけてしまっているのではないか、という思いを無意識のうちに抱いていたようだった。私はそう思う理由と問い合わせてみた。するとミナさんは、自分でもうまく言葉にできないままに抱えてきた前提について、少しずつ言葉を探しながら語っていった。その中には、「日本人は当日に誘えない」という認識が、あたかも普遍的なルールのように語られている場面もあった。私は、自身の経験を挟みながら、そうした感覚が本当に誰にでも当てはまる事なのかどうかを、ミナさんとともに考えてみた。語り合いのなかで、ミナさんは「どんな関係かにもよる」ということばをぼつりとこぼした。これまで「日本人とはこうだ」と一括りにしてきた「ドミナント・ストーリー」に、わずかな変容が生じていた。

このような変容が見えはじめた時期にあたる2023年3月、私はこれまでの経験の振り返る形での対話を提案し、録音の同意を得た。振り返りの中でミナさんは、自分が最も親しいと感じている日本人の友人との関係について触れ、以前よりも積極的に関わろうとしていること、これまで避けていたような行動にも一歩踏み出そうとする姿勢が芽生えていたことを語った。

李：（日本人の友達には）趣味の話はあまりしな  
いって言ってたけど、今もそう？

ミ：前よりは話せるようになった。やっぱり少し気  
は遣ってるが、良くなったと思う。

李：そう感じるきっかけがあったの？

ミ：友達は本当にいい人で。最近話す時は気を遣  
わなくなってきたが、彼女は全然気にしてない  
みたいで。ただ、話題によってはまだためら  
う。例えば中国の話題を出すときは、迷惑にな  
るかもと不安になることがある。

この前の春休みにディズニーに行く約束をして、一緒にチケットを買うことになった。淘宝<sup>4</sup>で買うと安くなるんだけど、それを話すときすごく気を遣った。日本人はそれを信用しないかもしれないし、淘宝のチケットなんて受け入れてもらえないと思ってた。こういうことを言う前に、いつも「やっぱり日本人は受け入れてくれない。言わない方がいい」と思ってしまう。

李：普段はそう思ってるんだね。じゃあ、今回はどう感じたの？

ミ：もしかしたら、彼女はここまで気にしないかも  
れない、淘宝もダウンロードして見てくれるか  
もって思った。それで話してみた。

李：話したんだね！どう伝えたの？

ミ：うん。チケットは旅行会社が発行してる正式な  
もので、ちゃんとしてるって説明した。言う前は  
「きっと受け入れてもらえないかも」って思って  
たから、どう伝えたら相手が困らないか、かな  
り慎重に考えた。

ミナさんは、日本人の友人との関係の中で自ら一歩を踏み出したことについて、自分にとっては大きな勇気のいる行動だったという。その語りを聞きながら、私の中には嬉しさと同時に、これまでミナさんの日本語人生を強く縛ってきた無意識の力の存在が思い起こされ、これから先、彼女がその力にどう向き合っていくかという不安も覚えた。だからこそ私は、この行動が単に日本人との関係の変化にとどまらず、ミナさん自身の中にある言語間の境界線の捉え方に揺らぎをもたらすような出来事になればと願った。

4 中国の通販サイト

そうした思いの中で、私はミナさんに、自らの行動を振り返ってどう感じているのか、その経験をどのような出来事として受け止めているのかを問いかけた。ミナさんの語りが、少しずつ自らの「オルタナティブ・ストーリー」へつながっていった。

李：いいじゃない。結局、チケットはどこで買ったの？

ミ：別々に買った。私は淘宝で、彼女は普通の方法で。

李：そうなんだ。彼女の反応はどうだった？

ミ：少し不安そうな感じはあった。でも、私を傷つけないように気を遣ってくれたのか、少し遠回しな言い方だった。「一緒に買おう」とまでは言わなかったから、私も「いいよ、いいよ」と返した。でも、私が淘宝で買うことは理解してくれた。「今回は別々に、また次の機会に様子を見て考えよう」という話になった。

李：彼女のその反応をどう思った？

ミ：完全に理解してる。お金のことだし、慎重になるのも当然だと思う。

李：説明したとき、言いにくさはあった？その後、距離ができたと感じた？

ミ：いや。むしろ、今までずっとこういう話を避けてきたんだなって思った。振り返ってみると、話してよかったです。彼女も淘宝について少し理解してくれたし、とりあえずダウンロードして見てみるって言ってくれた。思ったより抵抗なかった。

李：今のミナさんにとって、日本人の友達と接するときに大事なことって何だと思う？

ミ：もう話しちゃだめって、自分に無理やり言い聞かせるのはやめようと思ってる。そういうのって疲れるから。今まではみんな、人に迷惑をかけないように黙ってるんだと思い込んでたけど、よく考えたら、実際は言ってるんじゃないかなって思う。ただ、趣味や興味が違うってことはあ

ると思う。

李：それってどういうこと？

ミ：今こうして話してると、毎回「自分は日本人みたいにできてない」とか「今の言い方、よくなかったかも」って思う。でも、もし相手が中国人だったらどう思っただろうって置き換えてみると、「ああ、日本人とか中国人とかじゃなくて、人それぞれなんだな」って感じことがある。

李：じゃあ、日本語で話すのがちょっと楽になつたってこと？

ミ：うん、そう思う。もう、全部が自分の責任って思わないでいいんだなって。

やりとりの終盤、私は、淘宝について友人に自ら提案したミナさんが、その後、友人の反応をどのように受け止めたのか、またそれに対してどのような意味づけを行ったのかを尋ねた。加えて、これまで長く「日本人」に近づきたいと望んだミナさんが、現在では「日本語を使い、日本人と接している自分」をどのように捉えているのかについても問い合わせた。するとミナさんは、日本人の友人との関係の中で相手の立場に立って考えるという姿勢を示した。それは、彼女自身が中国語でのやりとりの中で自然な自分として感じていた行動であり、日本語を使う関係性においても、同様の姿勢が少しずつ立ち現れてきていたことを示すものであった。その上、語りの中には、ミナさん自身の言語意識に変容が生じていることも感じられた。かつては「日本人」というカテゴリーを前提に相手を捉えていた彼女が、「人それぞれ」という視点を持ちはじめているように思えた。

ミナさんとは、約半年にわたり、日常生活のささやかな出来事を出発点として、「日本人と関わるときに生じる葛藤」というテーマを見つめ直してきた。そうした語りの蓄積の中で、ミナさんの語りの中に、「日本人とはこうしなければならない」という固定的なイメージから、「人間とは一人ひとり違う存在である」という柔軟な認識への転換を見出すことができた。彼女は、これ

まで想像していたイメージとしての「日本人」ではなく、目の前にいる一人の友人と向き合おうとしていた。もちろん、ミナさんは日本人の友人と接する時に「やっぱり少しは気を使います」と語っており、今なお言語間の境界線の制約による影響を完全に離れているわけではない。しかし、そのような葛藤はもはや彼女の思考を縛りつけるほどの重さを持ってはいなかった。

#### 4. 3. 研究者・実践者としての省察

本研究におけるナラティブ・プラクティスは、葛藤や思いを語ることを介して相手と共に問題を見出し、その意味を構築するプロセスである。そのため、研究者としての分析的な姿勢だけでなく、実践者としての問い合わせや関わり方もまた省察されるべき対象となる。本節では実践を通して生じた内省を以下の四点に整理する。

第一に、私の問いかけがミナさんにとって過度な負荷となっていたという懸念がある。例えば、「どうして友達に聞けないですか」「どうして『話しちゃダメ』って感じると思いますか」といった繰り返される問いは、相手を追い詰めるような印象を与えかねない。一方で、それらの問いはミナさん自身が無自覚に受け入れていた社会的言説を捉え直すきっかけにもなった。「ドミナント・ストーリー」を揺さぶり、言語間の境界線の意味を共に見直すためには、時には鋭い問い合わせをする構えが不可欠であった。

第二に、語りの可能性を広げるつもりであっても、私の語りがミナさんにとって価値判断の押し付けとして作用するリスクがある。例えば、2023年1月の対話において、私が自身の経験を交えて「日本人も実は留学生との関係に戸惑いを抱えているかもしれない」と語った場面があった。その語りは、ミナさんの語り以外の可能性を探求する意図があったものの、語りの幅を狭める結果にもなり得た。実践者の語りは、対話を促すリソースであると同時に、権力的に作用する危

うさを常に孕んでいる。

第三に、言語間の境界線の制約が葛藤の背景にあると判断し、それを前提に問い合わせ立てた時点で、すでに私の解釈が色濃く反映されているという問題がある。こうした判断が独断的になっていなかつたか、常に問い合わせ直す姿勢が求められる。ただし、ミナさんが言語的・文化的葛藤を繰り返し語っていたこと、語ろうとする姿勢を示していたことから、語りに応答する形で実践者が関わることには一定の正当性があったと考える。

第四に、本実践は、「教師と学習者」という制度的枠組みに依らない、日常的関係性の中で対話を重ねる試みであった。固定化された現実を揺さぶり、問い合わせを構築するというフレイレの教育観に照らせば、本実践も「対話的教育」として位置づけられる。ナラティブ・プラクティスを日常的な社会的言語実践として捉えるならば、それは心理的援助の専門性に依存するものではなく、市民的な実践として広がりうる可能性を持つ。その意味で、本実践は、「教師と学習者」という制度の枠外において言語文化教育の可能性を探る試みでもあった。しかし、教育機関内での実施とは異なり、そこでの実践にはまた別種の課題があると予想される。本研究ではその点まで踏み込むことはできなかった。

### 5. 総合考察

#### 5. 1. 対話的関係性の中で支えられるナラティブ・プラクティス

本節では、RQ1:「ナラティブ・プラクティスは心理的援助の専門性に頼らずとも、対話的関係性の中で語りを支えることは可能か」に応答するため、ミナさんとの実践における語りの変容、それを支える対話的関係性と社会的文脈の働き、そしてナラティブ・プラクティスが社会的言語実践としてもつ意義について検討する。

ミナさんの語りにおける変容は、「日本語で話す自分」と「中国語で話す自分」の間にあった線引きを問い合わせ直すプロセスとして現れた。初期の語りでは、彼女は「日本語では話せない」と繰り返し述べており、特に激しい感情を伴う話題は日本語の文脈から排除されていた。その背景には、日本語という言語が「婉曲的で丁寧でなければならない」「感情を抑えて話すべきである」といった社会的規範と結びついて内面化されていたことがある。ミナさんはそのような「あるべき言語使用」を自身の語りの前提とし、逸脱することに對して不安であった。しかし、ナラティブ・プラクティスにおける繰り返しの対話を通して、彼女は次第に「なぜ話してはいけないと思うのか」といった問いに向き合うようになった。例えば、日本人の友人に中国の通販サイトを紹介することに不安を抱えていたミナさんは、最終的には「相手によっては受け入れられるかもしれない」という感覚に至り、自ら話題を切り出す行動をとるに至った。後に「話しても全然悪くなかった」と振り返り、自身の不安が現実に即したものではなかったと気づいた。

こうした変容を可能にしたのは、対話の協働性である。つまり、対話は一方向的な情報交換ではなく、語り手と聞き手が共に意味を構築していく営みである必要がある。例えば、ミナさんの「日本人は当日に誘えない」という語りに対し、正否を問うのではなく、「なぜそう思うのか」「他にも同じような経験があるか」といった問い合わせを投げかけ、語り手が自身の前提を再考できるよう促した。そして、協働的対話が成立するには、対話的関係性が不可欠である。対話的関係性は、語り手の開示的な態度と、実践者がそれを受け止め、ともに問題を再構成していく構えが交差する相互の信頼に基づく場として成立する。本研究が取り扱うナラティブ・プラクティスは、研究者と対象者の双方が共有する背景、経験、文脈に根ざして構築される関係性の中でこそ、力を發揮する。

加えて、ミナさんの語りの変容には、ナラティブ・プ

ラクティスにおける対話的な関係性に加え、彼女の置かれた社会的文脈も大きく影響していた。淘宝の話題を出した際、友人が好意的に反応した体験は、ミナさんの「日本人は受け入れてくれない」という一枚岩的イメージを揺るがした。こうした肯定的な反応を含む社会的環境の存在が、語りの再構成を促す重要な土壤となった。ここで重要なのは、彼女が自身の置かれた環境のポジティブな側面に気づくきっかけとなつたのが、ナラティブ・プラクティスという対話の実践であったという点である。語りの変容は、彼女の内面だけに生じたのではなく、他者との相互関係や環境との関わりの中で、関係性を再構築する過程によってもたらされた。例えば、ミナさんが淘宝の話を切り出さなければ、「友人は受け入れてくれる」に気づくこともできなかっただろう。

ナラティブ・プラクティスはこのように、語り手が日常の中で見過ごしていた他者の反応や関係性の可能性を捉え直す枠組みを示す。そして、個人の語りを再構成するのみならず、語りと社会的環境とのつながりを再構成する装置として機能している。ミナさんの実践では、語りの内容が変わったのではなく、「語ることの意味」や「問題の前提」そのものが揺らぎ始めていた。これは、ナラティブ・プラクティスにおいて重視される「問題の外在化」や「支配的な物語の脱構築」の働きかけによるものである。本実践は、心理的援助の専門性に依らず、日常的な関係性の中で行われた。したがって、語りの変容は語り手の内面の成長にとどまらず、語りが交わされる日常的な関係性や社会環境の中で「問題の意味」が再構成された結果と捉えるべきである。

従来、治療的実践とされてきたナラティブ・プラクティスは、本実践において実のところ、個人の問題を個人に回収せず、その社会的・関係的な位置づけを問い合わせすることを目的としていた。その意味で、治療としての語りと教育的・社会的な語りは、本質的に重なる営みであるとも言える。故に、ナラティブ・プラクティ

スとは、社会的関係そのものを問い合わせる営みであり、「治療手法／実践方法」や「ナラティブ・プラクティス／ナラティブ・アプローチ」といった制度的な線引きを越えていく可能性を内包している。

## 5. 2. 誰がナラティブ・プラクティスを行うのか

本節では、RQ2に答えるために、ナラティブ・プラクティスを支える実践者の構えに焦点を当てる。ナラティブ・プラクティスを社会的な言語実践として担う実践者に求められる二つの構え、すなわち①共生社会の一員としての倫理的自覚、②批判的自己省察の力に注目し、実践を手がかりに考察する。

本研究が再定位を試みるナラティブ・プラクティスは、特定の資格や技法に依拠するものではない。むしろ、社会的に編み込まれた言説や関係性に対して、語り手とともに問い合わせを立て直すための日常的な営みとしての実践である。そのため、実践を担う者には、制度的な権威に代わって、日常を生きる市民として目の前の語りにどう向き合うかという倫理的な構えが問われる。細川（2022）は、ことばの活動を「共に生きる」ための営みと捉え、言語教育の実践者が社会の中で生起するさまざまな差異に耳を傾ける覚悟の重要性を説いている（pp. 36-38）。これは、語られた言葉に受動的に応じるだけでなく、語られない沈黙に応答する姿勢を含意する倫理的呼びかけである。

実際、私は日本語教育実践者としてだけでなく、共生社会の一員としての立場を自覚しながらミナさんの語りに向き合った。ミナさんが日常的な語りの中で繰り返し現れた「日本語を使うと素の自分でいられない」「迷惑をかけてはいけない」といった語りに違和感を覚え、「このままでよいのか」と感じたのが実践の起点である。このような問いは心理的援助の専門性に基づく対応ではなく、「語りかけるべきかどうか」という日常的な実践者の葛藤から始まった。細川（2022）がいう「不要な争いを回避し、かつ泣き寝入りしない

ために」対話することに覚悟と希望を託す思い（p. 38）に通じるものであった。

私が主張したい共生社会における実践者の姿勢は、対象者に手を差し伸べる側として振る舞うのではなく、語りのなかでともに考え、迷い、語ることを引き受ける姿勢である。実際、ミナさんとの対話において、彼女の語りに明確な問題や支援すべき課題を見出そうとするのではなく、「その語りがどこから来るのか」「なぜそう語られたのか」をともに問い合わせするような応答を模索してきた。語りには、どちらが正しいかを判断する立場ではなく、この違和感と一緒に考えてみようとする並走的な関係性があった。この姿勢は、ナラティブ・プラクティスにおける「専門家を消し去る」という理念にも通じている。つまり、語り手に対して、ともにわからなさを抱えながら語る者として関わる構えである。

共生社会の一員としてのナラティブ・プラクティスの実践者には、共に語る関係性を築くと同時に、語りの背景にある社会的な不均衡や沈黙に対して応答する責任がある。それを怠ったとき、語りの再構成に至らず、むしろ葛藤の再生産に加担してしまう危うさがある。このことは、移民女性のアイデンティティを研究するノートン（2000/2023）が報告する事例にも示されている。ノートンは、移民女性であるマイは移民に対する差別的な言説を再生産していたが、研究者である自分がそれを問い合わせすことなく沈黙したと記述している。後に、その沈黙がマイの苦しみにつながったと振り返っている（p. 213）。この事例は、語りに批判的に関わることの重要性を示すとともに、次に述べる「批判的自己省察の力」との接続をも示唆している。

ナラティブ・プラクティスが協働的な営みとなるには、「批判的自己省察の力」が不可欠である。なぜなら、いかに対象者のウェルビーイングを尊重しようとする意志があっても、対話が実施者または対象者いずれかの満足にとどまるのであれば、意味の再構築は一方向的になりかねない。この点は、ナラティブ・プラク

ティスが質的研究の一形態であることも関係している。館岡(2024)は、質的研究の本質的特徴として、①文脈に依存していること、②研究者と対象者が分離不可能であることを挙げている。そして、このような特徴は「強みであると同時に弱みともなりうる」と指摘している(pp. 8-9)。すなわち、実践者と対象者のあいだにある関係性が、語りの内容や方向性に少なからず影響を及ぼす以上、語りの背後にある文脈や構造を常に問い合わせ直す姿勢が不可欠である。広瀬(2015)もまた、研究者に求められる姿勢として、「明らかにしたい事象との関係を明示し、自らを批判的かつ内省的に記述すること」が重要であると述べている(p. 77)。つまり、研究の対象とされる語りや行為が、どのような立場から、どのような意図で取り上げられているのかを明確にしたうえで、自身の関与そのものを問い合わせ直す作業が欠かせない。このような内省への自覚は、研究者=実践者がナラティブ・プラクティスにおいて求められる倫理的責任の根幹である。

本研究でも、批判的自己省察の視点を踏まえ、対話の過程を単なる語りの収集としてではなく、語りの共構築のプロセスとして捉えるよう努めてきた。実践の前後において、以下のような配慮を重ねた。実践前には、「この場面は研究として記録してもよいか」という同意確認をその都度行い、対象者が安心して語れる場を確保した。実践後には、まとめた語りの分析をミナさんに共有し、彼女の意見や違和感を丁寧に聞き取ることで、語りが研究者の視点によって一方的に解釈されることのないように留意した。さらに、4. 3. で述べたように、私はミナさんとのやり取りにおいて、自身の問いかけや判断が語りの展開にどのような影響を与えていたのかを実践記録をもとに再検討し、可能な限りその作用を可視化するよう努めた。例えば、「どうしてそう思うのか」と繰り返し問うことで、ミナさんに「説明させてしまっていたのではないか」という事後的な気づきを得るに至った。こうした内省は、批判的自己省察の力によって初めて可能になるものである。

したがって、ナラティブ・プラクティスの実践者に求められるのは特定の資格や技法ではなく、倫理的自覚と再帰的姿勢に根ざした構えである。これは社会的言説を問い合わせ直す語り手とともに「わからなさ」を抱え、対話的関係性の中で意味を問い合わせ直す姿勢によって支えられていることを示している。その意味で、ナラティブ・プラクティスは従来「治療手法／実践方法」として分断されてきた制度的な枠組みを横断しうる実践である。さまざまな差異の中で生まれる違和感や沈黙に応答し、共に意味を模索するという行為は、心理的援助であれ言語教育であれ、本質的には社会的関係の再構成に関わる営みである。ナラティブ・プラクティスには、専門的な制度に位置づけられるものではなく、むしろ日常的な関係性の中から立ち上がる社会的な言語実践としての再定位が求められる。他者とともに生き、語り合う社会のなかで、実践の可能性を開いていくことが重要である。

## 6. 結論と今後の課題

本研究は、心理的援助の枠組みで発展してきたナラティブ・プラクティスを、言語文化教育における社会的な言語実践として再定位する可能性を探った。実践の分析を通して明らかになったのは、言語間の境界線の制約によって語りが制限される場面においても、対象者と実践者が関係性の中で語り合いを重ねていくことで、その境界線の意味自体が問い合わせ直され、新たな可能性がひらかれていく過程であった。

本研究で扱ったナラティブ・プラクティスは、語り手の内面の変化を引き出す介入ではなく、語りを支える社会的条件や関係性そのものの再構成に力点を置いた実践であった。そして、実践者自身が語り合いの関係性の中に自らの立場を置き直すことで、共生社会の一員として担う語りへの関与のあり方が浮かび上がった。語りに寄り添い、問い合わせ直し、共に意味を構築する構えは、教育実践者にとって重要な役割で

あり、同時にそれは質的研究の枠組みとも深く結びついている。したがって、語りの生成に関わる実践者自身が、自らの関与に対して批判的かつ省察的であることが、ナラティブ・プラクティスの実践を支える倫理的な基盤となる。

社会的言説を問い合わせる実践は、心理的援助であれ言語教育であれ、本質的には社会的関係の再構成に関わる営みである。ゆえに、ナラティブ・プラクティスは「治療手法／実践方法」「ナラティブ・プラクティス／ナラティブ・アプローチ」といった制度的線引きを超えて、社会的関係そのものを問い合わせる営みとして、言語文化教育における実践へと再定位されうる可能性を持つ。本研究は、ナラティブ・プラクティスを公共性と日常性を兼ね備えた社会的言語実践として再構想する視座を提示した。

一方で、本研究には以下の課題が残されている。第一に、分析対象がミナさんとの一事例に限られており、そこで得られた気づきや変容がどこまで可能性を持つかは、今後のさらなる検証が必要である。第二に、本研究ではナラティブ・プラクティスとナラティブ・アプローチの関係を再考したが、両者をより丁寧に整理する作業は残されている。第三に、ナラティブ・プラクティスを支配的な言説を脱構築する社会的な言語実践として構想したものの、実践が実践者個人の関係性や感受性に大きく依存しているという点は否定できない。より持続可能かつ社会的に展開可能な枠組みの構築に向けた検討が求められる。

語りの実践は、たった一人との対話から始まるが、その対話が向き合っているのは常に社会の中にある言説と交差する世界である。本研究で示されたナラティブ・プラクティスの再定位の可能性は、今後、より多様な実践の中で問い合わせられ、共生社会の中でことばと共に生きる人々のための語りの営みとして開かれ続けていくことが望まれる。

## 文献

- 尾辻恵美 (2016). メトロリンガリズムとアイデンティティ——複数同時活動と場のレパートリーの視点から『ことばと社会—多言語社会研究』18, 11–34.
- 国重浩一 (2013). 『ナラティブ・セラピーの会話術——ディスコースとエイジェンシーという視点』金子書房.
- 嶋津百代 (2018). 日本語教育・教師教育において「語ること」の意味と意義『言語文化教育研究』16, 55-62. <https://doi.org/10.14960/gbkkg.16.55>
- 高松知恵美, 原伸太郎 (2023). 言語学習者の「自律」を実現するための自己のストーリーの獲得『言語文化教育研究』21, 241–261. <https://doi.org/10.14960/gbkkg.21.241>
- 館岡洋子 (2024). 日本語教育における質的研究に求められるもの——協働的リフレクシビティからフィールドの変革を考える『日本語教育』187, 5-19.
- 野口裕二 (2009). 『ナラティブ・アプローチ』勁草書房.
- 野口裕二 (2018). 『ナラティブと共同性——自助グループ・当事者研究・オープンダイアローグ』青土社.
- フレイレ, パウロ (2018). 『被抑圧者の教育学』(50周年記念版;三砂ちづる, 訳) 亜紀書房. (原典 1979)
- 広瀬和佳子 (2015). 「実践研究」から考える質的研究の意義——言語観・教育観・研究観のズレを可視化する議論のために. 館岡洋子(編)『日本語教育のための質的研究入門——学習・教師・教室をいかに描くか』(pp. 27-48) ココ出版.
- 保坂裕子 (2014). ナラティブ研究の可能性を探るための一考察——〈Who-are-you?〉への応答としての私の物語『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』16, 1–10. <https://u-hyogo.repo.96>

- nni.ac.jp/records/1821
- 細川英雄 (2022). ことばの教育は何をめざすか——共生社会のための well-being. 稲垣みどり, 細川英雄, 金泰明, 杉本篤史 (編) 『共生社会のためのことばの教育——自由・幸福・対話・市民性』(pp. 14–40) 明石書店.
- ノートン, ボニー (2023). 『アイデンティティと言語学習——ジェンダー・エスニシティ・教育をめぐつて広がる地平』(中山亜紀子, 福永淳, 米本和弘, 訳) 明石書店. (原典 2000)
- 宮崎聖乃 (2023). 「ヒューマンライブラリー」再定義の試み——ナラティブ・アプローチの実践と設定としての「図書館」『共生学ジャーナル』7, 69–88. <https://doi.org/10.18910/90813>
- 義永美央子 (2021). 第二言語の使用・学習・教育とイデオロギー——モノリンガルバイアス, 母語話者主義, 新自由主義. 尾辻恵美, 熊谷由理, 佐藤慎司 (編) 『ともに生きるために——ウェルフェア・リングイステイクスと生態学的視点からみることばの教育』(pp. 136-163) 春風社.
- 李思儀 (2024). 言語間の境界線を脱構築するための言語意識支援の必要性——複言語話者が抱えるアイデンティティの葛藤から『早稲田日本語教育学』37, 85–105. <http://hdl.handle.net/2065/0002004643>
- ホフマン, リン (2014). 家族療法のための再帰的視点 (野口裕二, 野村直樹, 訳). S. マクナミー, K. J. ガーゲン (編) 『ナラティブ・セラピー——社会構成主義の実践』(pp. 16-42) 遠見書房. (原典 1992)
- Council of Europe. (2001). *Common European framework of reference for languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge University Press. <https://rm.coe.int/1680459f97>
- Fox, S., & Brummans, B. H. J. M. (2019). Where's the plot? Interprofessional collaboration as joint emplotment in acute care. *Journal of Applied Communication Research*, 47(3), 260-282. <https://doi.org/10.1080/00909882.2019.1624807>
- García, O. (2009). Education, multilingualism and translanguaging in the 21st century. In A. Mohanty, M. Panda, R. Phillipson & T. Skutnabb-Kangas (Eds.), *Social justice through multilingual education* (pp. 140–158). Multilingual Matters. <https://doi.org/10.21832/9781847691910-011>
- Hammoud-Beckett, S. (2022). Intersectional narrative practice with queer Muslim clients. *Journal of Intercultural Studies*, 43(1), 120–147. <https://doi.org/10.1080/07256868.2022.2016664>
- White, M. (2007). *Maps of narrative practice*. W. W. Norton & Company.
- White, M., & Epston, D. (1990). *Narrative means to therapeutic ends*. W. W. Norton.
- Winslade, J. (2019). Can restorative justice promote social justice? *Contemporary Justice Review*, 22(3), 280–289. <https://doi.org/10.1080/10282580.2019.1644173>

---

Article



# Repositioning narrative practice in language and culture education:

## A dialogic inquiry into language boundary constraints

LI, Siyi\*

*Graduate School of Japanese Applied Linguistics,  
Waseda University, Tokyo, Japan*

### Abstract

This study examines how narrative practice, which has developed within the field of psychological support, can be repositioned as a socially situated linguistic practice in language and culture education. The analysis focuses on interactions between an educator and a multilingual participant, documenting how the meaning of language boundary constraints was reconsidered and how opportunities for expanding the participant's narrative possibilities emerged through dialogue. Narrative practice is understood as a process that reorganizes the social discourses and relational contexts shaping one's narratives rather than an intervention aimed at individual psychological change. The findings suggest that such work relies on an ethical stance that supports joint meaning-making rather than specialized therapeutic expertise. When educators cultivate critical self-reflexivity and recognize their responsibilities within a pluralistic society, they become able to participate constructively in these dialogic processes. The study argues for conceptualizing narrative practice as a public and everyday educational activity that challenges established divisions between therapeutic and instructional domains and expands the possibilities for learner agency and voice.

**Keywords:** narrative approach; dialogic practice; deconstruction of language ideologies

© ALCE 2025. Except where otherwise noted, this article is licensed under the CC BY-SA 4.0 license

---

\* E-mail: lisiyi.0728@fuji.waseda.jp